

第23回平和祈念コンサート 講演会

こいわまさこ
【小岩昌子氏】 今、ご紹介いただきました小岩昌子と申します。

今も桜台に住んでいるのですけれども、桜台で生まれて、桜台で育って、桜台で働いて、今も桜台に生きております。

私が産まれたときは練馬村だったのですけれども、その翌年から練馬町に変わったようでございます。ちょうど今年で86歳なので、年数にすると、86年間ずっと練馬に住んでいたということになります。私は練馬をすごく愛しております、住み心地のいい練馬になるように日々願っております。

今日は、戦争中の話をさせていただくことになりましたけれども、練馬にも戦争があったということで、練馬の話、そして、私がそのときに体験した話をさせていただきたいと思います。

皆さんの中にはご存知の話もたくさんあると思いますけれども、聞いていただければ幸いです。では、よろしく申し上げます。

「成増飛行場、あちこち落とされた1トン爆弾」。

今の光が丘団地のところに成増飛行場、または高松飛行場と言いましたけれども、飛行場がありました。

今、駅から出たところにイチョウ並木の真っすぐな道があると思うのですけれども、そこが滑走路だったというふうに言われております。

成増飛行場ができる前は、農家の人たちが作物をつくっていたのですが、その作物がまだ実らないうちに、まだ収穫の時期が来ないうちに、飛行場をつくることになったそうです。

飛行場づくりをしたのは、近くの農家の方と、それから学生です。高等小学校

の生徒と、それから朝鮮人と囚人の人たち。そういう人たちがみんなで、突貫工事で成増飛行場をつくったと言われていました。

夏の暑い日には皮膚に水玉ができるくらいに汗をびっしょりかいて、猫車を押して飛行場をつくったと言われております。

私は実際に飛行場づくりを見たわけではありませんけれども、飛行場づくりは本当に大変だったそうで、夜になると朝鮮の人たちが農家の家に「トウガラシをくれないか」と言って、もらいにきたという話を近くの方々から聞きました。

成増飛行場ができ上がりましたら、近くに建物ができましたので、航空隊の人たちがたくさん引っ越してきたそうです。そこから訓練をして、特別な飛行機がやってきて、その飛行機に乗って航空隊の人たちが出発していったそうで、そのときには、近くの人たちがマフラーとか、それから白いハンカチとかそういうものを振りながら、お別れをしたそうです。

そして、特攻機は空を一回りして飛び立っていったのだという話を、その地域の人たちから聞きました。

それから、もう一つは、1トン爆弾がたくさん落ちたのですけれども、1トン爆弾は1発落ちると10メートルぐらいの穴があくのです。私の家の裏に農家の家があったのですけれども、農家の納屋に1トン爆弾が落ちたら、その納屋が全部すっ飛んでしまったという話もあります。

3軒ぐらい先の家に1トン爆弾が落ちたことがありましたけれども、そうしたら、その家は粉々に壊れてしまったそうです。その防空壕に入っていたその家の人たちは這い出してきたのですけれども、隣の家の防空壕は穴を深く掘ってつくってあったので、その防空壕に潰されてしまって、結局、そこに住んでいた3人の方は亡くなってしまったそうです。

私は離れたところにある、自分の家の防空壕に入っていたのですけれども、空

襲のサイレンがおさまると近くの人たちがシャベルを担いで、急いで潰された防空壕に駆け寄って穴掘りをする、また、空襲の警報が鳴ると防空壕に戻ってくるということを何回も何回も繰り返していました。ですけれども、結局、潰されてしまった方はそのまま亡くなったのだということを後から聞きました。

ここの練馬駅に西武線と待ち合うところがありますが、その線路には1トン爆弾によって、大きな穴があいてしまって、電車が通行止めになったそうです。それから、開三中の裏だとか、土支田の方だとか、そういうところにも1トン爆弾がたくさん落ちたそうです。

それから、昭和13年ごろだったと思います。

国家総動員という約束事が決められ、それと一緒に配給制が始まり、米、みそ、砂糖、しょうゆなどの生活用品が配られるようになりました。それから、衣服は切符制になっていまして、100点が1枚の切符になっていました。例えばセーターは何点とかシャツは何点とかと決まっていますので、その品物を買うと切符が無くなっていくわけです。十分な配給ではありませんでしたので、着るものは少なくなるし、それから、破れたときも買うわけにもいかないから、修理をして着ていました。家にお母さんが、夜になると靴下の修繕をしたり、シャツの修繕をしたり、セーターの編み直しをしていたのだと思います。

それから、お米や何かはとても不足していたので、いつもお腹が空いていました。どうすれば少しでもお腹が一杯になるような食事ができるのだろうかということで、うちの母たちもそうですけれども、非常に工夫して、なるべくということで頑張ったのだらうと思います。

そんなとき、一番若い人にケーキ一つが配給になりました。その家の中で一番若い人一人にだけ、ケーキが一つ配給されることになったのです。

私の家は、弟が一番若かったので、私の分ではないのです。そのケーキは弟の

分だから、みんな食べられないわけですね。

だから、弟が帰ってくるまで戸棚の中に入ったケーキが気になって気になってしょうがなかったのです。9人家族でしたから、9人がみんなそういう思いを持っていたと思います。

だけれども、それはどうにもならないということで、弟が帰ってくるのを待っていたのですけれども、弟が帰ってきたときにどんな顔をするかなとかどうするかな、どうやって食べるのかなということは家族がみんな思っていたと思います。

そうしましたらば、弟が帰ってきて、「どこにケーキがあるんだ」と言うので、「戸棚の中にあるから」と言って、戸棚の中からケーキを出したのです。

そうしたら、弟が「みんなで分けて食べよう」と言ったので、その一つのケーキ、今のケーキと比べられないくらい小さなケーキでしたが、9等分して食べました。本当に親指ぐらいの大きさなのです。でも、そのときの味は、もう何十年も経っているのに思い出します。「ああ、あのときはこうだったな」ということを思い出すときがあります。

私はまだそのときは小学生でしたけれども、そのぐらい何も食べるものもない大変な時代だったのです。けれども、みんな、我慢すれば戦争は勝つと思っていたのです。

ですから、小さい子ども、皆で声を合わせて「欲しがりません、勝つまでは。欲しがりません、勝つまでは」って言っていました。みんなで、大きな声を上げて手をつないで道を歩いたことを今でも覚えています。

そんな大きな声を出したら、お腹が減るのではないかって今は思いますけれども、でも、そのときは子どもも大人も、神風が吹けば勝つとか、そういう気持ちがあったのです。

昭和16年に太平洋戦争が始まりました。

太平洋戦争が始まったとき、私は小学校6年生でした。

ランドセルを背負って学校に行こうと出てきたときに、ちょうど父が出てきて、「みんな集まってくれ」と家族中が集められました。

父の雰囲気がとても緊張しておりましたので、大変な話だろうということは私もそのときは思いましたけれども、父はそのときに、「アメリカとの戦争が始まった」と言いました。

中国との戦争は始まっていたのですけれども、「アメリカとの戦争が始まった。大変だぞ」と真剣な顔で話してくれました。「おまえたち。しっかりしろ」ということを言ってくれたのだらうと思います。

私は、兄とは年齢が離れていましたが、兄は兵隊検査が終わって、それで、幹部候補生の試験に受かって軍隊の洋服を着ていました。

兄が椅子に座って、父の話を聞いている姿を今でもとてもよく覚えていますけれども、非常に緊張した感じでしたので、みんな、「ああ、大変なことになる」と思っていたと思います。それで兄は1週間ぐらい経ってから、満州へ出征していきました。

そのときに父が、大きな声ではなかったのですけれども、少し小さいトーンを下げた声で、「戦争に行くために子どもを育ててきたわけではない」ということをつぶやいたのです。私たちは戦争に勝つと思っていたし、「欲しがりません、勝つまでは」って、みんな「勝つ、勝つ」って思っていたのですけれども、そのとき父が言った言葉はとてもよく響いていて、今でも、「ああ、お父さんはあんなことを言ったな」ということを、父はとっくに亡くなっているのですけれども、思い出すときがあります。

こういう大変な生活の中で、一番大変だったのはお母さんたちだったと思います。私の母は40歳ぐらいだったと思います。6人兄弟がおりました。

母たちの仕事がなぜ大変だったかという点、配給があると、配給品の仕分けをするので町会事務所に行かなければならないですし、切符制だと、切符も分けなければならぬ。それから、配給のお米だとかそういうものも見なければならぬのです。

そのころは、ニュースのわかる場所が町会しかなかったため、みんな町会に集まってきたのです。だから、町会に行ってやる仕事と、それから自分のうちに帰ってきて家族の面倒を見ることと、それから「産めよ、増やせよ」ということで、子どもをたくさんという話があったため、子育てをしながら家事もしなければならぬし、それから近所の人たちの世話もしなければならぬし、母さんたちはすごく大変だったなと思います。

そのほかにも、母さんたちが大変だったと思うものに、バケツリレーの訓練がありました。バケツに水を入れて、はしごをかけて、水の入ったバケツを持ちながら、はしごの上まで行き、それを順々に渡して火の元のところへ水をかけるという訓練でしたが、大変だったと思います。

それから、敵が攻めてきたときに戦うためのものとして、竹やりの訓練もありました。竹の先を斜めに切って、尖ったような形にして、それで「エイヤー」と。そういった訓練でした。

それから、お父さんとかお兄さんとか、戦争に行かないで残っていた人たちには、召集令状が来ました。

召集令状は「赤紙」といって、赤紙が来たら絶対に断れないのです。何月何日の何時に、どこの部隊に入れという通知が来ると、みんな嫌だとは言えない。それこそ、泣きたくなってもその命令には従わなければならぬので、みんな軍隊に入っていました。

召集令状が来た人を、私たち町会の人たちは、みんなで最寄りの駅まで送って

いきました。

私のところは最寄り駅が江古田駅でしたので、江古田駅までみんな日の丸の旗を振りながら、「勝ってくるぞと勇ましく」というような歌を歌って兵隊さんを送り出したのです。

でも、そのとき送り出されていった人たちや、出征していった人たちは、そのとき、どんな気持ちだったのでしょうか。

うちの隣にお兄さんがいたのですが、そのお兄さんは、私を「まさちゃん、まさちゃん」と言ってとても可愛がってくれました。そのお兄さんは兵隊検査では、体が不自由だから兵隊にはなれないという「丙種合格」でしたので、私は、そのお兄さんは兵隊に行かないと思っていました。

それから、お兄さんも召集令状は来ないだろうと思って、どこか地方の中学校の先生をするのでということで、地方に行っていたのです。

そうしたら、そのお兄さんにも召集令状が来たのです。

そして、そのお兄さんは、奥さんと赤ちゃんと3人で戻ってきました。

出征するときには本籍地に戻って、本籍地から出征していくのですけれども、ちょうどうちの隣が、そのお兄ちゃんの本籍地だったのです。

それで、2日ぐらい経ってから、兵隊に行くことになったのですけれども、そのとき奥さんが、ずっと泣いているのです。泣いて泣いて、挨拶するときも泣いているしご飯を食べているときも泣いているし、何かするときも、ずっと泣いているのです。

そのとき小学生だった私は、どうしてあのお姉さんは泣いてばかりいるのかとても不思議でした。終わりの方になったら「もうそんなに泣くな」と言いたいくらいにずっと泣いていたのです。

それで、知り合いだったものですから、千葉の習志野まで送っていきました。

その奥さんは、電車の中でも、習志野に着いても、練馬に帰ってきてからも、ずっと泣いていたのですけれども、また地方へ赤ちゃんをおんぶして帰っていきました。

そして、そのお兄さんは戦争に行って帰ってきませんでした。

たしか、フィリピンに行ったということを聞きました。

それから、その赤ちゃんをおんぶしていたお姉さんは、病気で亡くなりました。

背中におんぶしていた子どもは男の子なのですけれども、一人で練馬に帰ってきました。

それで、そのときの赤ちゃんは、今、私のうちの隣に住んでいます。「おばさん、おばさん」と言って私にいろいろな話をしてくれるのですけれども、そのときの別れの様子を今でも思い出します。

今思えば、あのとき小学生だった私には、戦争に家族が召集されていくときの悲しみというのが分からなかったのだと思います。

そんなことがあるうちに、どんどん色々なことが激しくなっていました。

そのころ私はまだ女学校に毎日通っていたのですけれども、ある日、突然、担任の先生が、「明日からは学校に来なくてもいい」と。それで、「明日から北区にある第二造兵廠ぞうへいしょう（※注1）へ行きなさい」と言われました。

何でそこに行かなきゃならないのか、詳しい説明はありませんでした。でも、先生にそう言われたので、つぎの日から北区にある第二造兵廠へ行くことになりました。

そのころ、学徒総動員令という決まりが出来ました。それから、国家総動員令というのが出来ました。そういうものが出来ると、それに当てはまる人は、それに違反することはできないのです。

ですから、学徒は工場へ働きに行くようにと言われたら、工場に行かないという事は出来ないのです、みんな工場へ出かけていきます。

それから、男の人たちは、学習を半ばにして、それこそ、兵隊さんの訓練、軍人と同じ訓練をすることになるのですけれども、中にはその後、戦場に行った人もいます。

それから、小学校の子どもたちはそれなりに家の仕事をしていたのですけれども、親戚がいなくて疎開先がない子どもは、学童疎開といって、学校の先生と一緒に電車に乗って旅館だとかお寺だとか、そういったところに出かけていきました。

子どもたちは、最初のころは、遊びに行くような気持ちでにこにこしていたのですけれども、疎開先の生活もすごく大変だったようです。勉強はできない、食べ物もない、それで、朝から晩まで燃料になる木の枝を集めたり、それから、お寺でも旅館でも、働かなければならない。それでいて、食べるものも食べられなかったのです、お母さんやお父さんのことを思い出して、子どもたちはすごく泣いていたということも聞きました。

70歳ぐらいの人たちで学童疎開に参加した人はたくさんいるのではないかと思います。

それで、私は学徒動員で工場に行ったのですけれども、私が工場ですらったことを話させていただきます。

私は工場で風船爆弾というのを作っていました。

風船爆弾というのは、直径10メートルぐらいの球形の下に爆弾と焼夷弾をぶら下げて、アメリカまで飛ばして、アメリカまで飛んでいったら、アメリカで爆弾を落として、そして被害を与える、そういう爆弾です。

「原子爆弾に比べて風船爆弾なんて何さ、笑っちゃう」という話がいつも返っ

てきますけれども、この風船爆弾というのは、日本が考え出した最終的な秘密兵器だったのです。

その爆弾は自動装置つきで、飛ばしたら、それが上がったり下がったりしながらアメリカまで飛んでいって、そこで爆弾を落として人に被害を加え、しかも、二日半でアメリカまで飛んでいく、非常にすばらしく、よくできた殺人兵器だったのです。

風船爆弾は全部で9,000発ぐらい飛んでいったそうです。結局、森林に落ちてしまったり、海に落ちてしまったりして、そのままになってしまった風船爆弾もありますけれども、いろいろと調べてみたら、その一つがアメリカのミネソタ州の公園に落ちて、その公園で遊んでいた親子、牧師さんの親子が7人、風船爆弾の爆発で亡くなったそうです。

その風船爆弾で罪のない人が亡くなったということ、私は成人して随分経ってから知ったのですけれども、やっぱり怖いなということ、をすごく思いました。

私が作った風船爆弾で、アメリカの罪のない人が死んだのだとしたら、私は戦争の被害ばかりを主張していたけれども、被害者だけではなくて、加害者でもあったのだということ、強く感じました。

だから私は、戦争反対ということ、戦争はあってはいけないのだと言うことは、戦争で被害者だけではなく加害者にもなるのだということ、をきちんと知ったうえで言うことが大事なのではないかと思っています。ですので、それがわかってからは、被害者であると同時に加害者でもあるということ、を考えて語り継いでいかなければいけないのではないかと思っています。

もうこれで終わりにしたいと思えますけれども、昭和20年に戦争が終わりました。その終わりになる少し前に、私が住んでいた氷川台の駅のすぐそばに、アメリカの艦載機がたくさん飛んできました。

その艦載機は急降下で下までおりてくるわけです。映画で見るような物凄い勢いで、屋根すれすれのところに艦載機がおりてくるのです。

そうして、その飛行機からアメリカ兵が機関銃で、逃げ惑う私たちを狙って撃ってきたのです。

それで、うちの近くにすごく豪傑なおばさんがいたのですけれども、「まさちゃん、そんなアメリカになんか殺されるものか。だから、防空壕になんか入らなくたっていいのだよ。絶対やられないから」と言って、そのおばさんは防空壕に入らなかったのです。そうしたら、そのおばさんは、防空壕に入らないから目立って見えてしまうわけです。それで狙われました。

そうして、そのおばさんは、本当に転げるようにして私のうちの防空壕に逃げ込んできたのですけれども、そのときに「まさちゃん、やっぱりもうだめだよ。明日から空襲になったら防空壕に入る。アメリカの飛行機が飛んできたら、絶対に防空壕に入って、撃たれないようにしなければだめだね」ということを私に一生懸命に話してくれました。

戦争の終わりのころは、アメリカの飛行機がすぐ目の前まで飛んできていました。そこには、逃げ惑う私たちの姿がたくさんあったはずです。私の家の屋根とか鴨居とか、そういうところには、アメリカ兵が撃ち込んだ弾が随分ありました。

昭和20年に終戦となりましたが、家も食べ物もない。そこで一番、私が今も目に残っているのは、浮浪児たちです。

家もなくなって、両親も死んでしまって、帰る家もない。疎開先から東京に帰ってきたら誰もいなかったという子どもたちがたくさんいたのです。

ですから、その子どもたちは、着るものもぼろぼろで、食べるものもなく、目ばかりきょろきょろさせて逃げ回っていました。その人たちは、もう70歳になると思います。その人たちのことを思うと、戦争というのは、絶対に無くしてい

かなければならないと思います。

それから、満州や南方から引き揚げてきたという人もたくさんいます。実際に引き揚げてきた人たちから、生活がすごく大変だったと聞いたことがあります。

まだまだ戦争のことはたくさんあると思います。でも、練馬で私がずっと生きてきて、思いついたこと、それから語れる時間があれば、またもっとずっと語っていきたいと思っています。

語りたくても語れなくて命を落としてしまった人がたくさんいると思うのです。

ですから、そういう人たちの気持ちも考えて、戦争というものはこういうものだということを、知っている人は知っているままに語り継いでいく必要があるのではないかと思っています。

以上でございます。ありがとうございました。

(拍手)

以上

※注1 ぞうへいしょう 造兵廠 武器や弾薬などの考案、設計、製造、修理などを行う施設